

1. 科目名 (単位数)	臨床心理基礎実習 (2単位)	3. 科目番号	PSMP5183
2. 授業担当教員	野口 理英子、武内 智弥、大島 朗生、 若松 直樹、後藤 進吾		
4. 授業形態	実習・演習	5. 開講学期	通年
6. 履修条件・ 他科目との関係	履修条件は特になし	履修形態 (通信教育)	SP
7. 講義概要	<p>本講義は、臨床心理の専門家として必要なクライアントとの援助的かかわりの基礎を実習する。「援助の枠組み」や「見立てと援助の関係」、「クライアント・家族並びにチームスタッフとの協働」、「倫理問題」などから、実際にクライアントをどう理解し、関わるかについて体得する。</p> <p>そのため、基礎的な複数のテーマを、実習・演習を通じて学ぶこととする。まず、クライアントへの基本的な関わり方 (テーマ 1: 1~8 回) を押さえる。次に、感受性訓練を行い、自分の感情や行動について自己理解を促す (テーマ 2: 9~16 回)。援助職としての倫理観 (心構えや役割、他の専門家との協働、テーマ 3: 17~22 回)。様々な人と人との「関わり・関係」について体験的に学ぶ (テーマ 4: 23~30 回)。これらの基礎的な臨床心理の専門家としての関わり方、姿勢、考え方を習得した上で、事例などを題材にし、クライアントの理解の仕方、見立て方、援助の仕方とその実際へと展開していく (テーマ 5~7: 31~60 回) こととする。</p> <p>本講義を通じて、専門職としての倫理観を</p>		
8. 学習目標	<p>臨床心理の専門家として必要な基礎的な事柄について、表面的な理解に留まらず、体験的に学び、習得すること。具体的には、以下のテーマについて学び向上させること</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. クライアントへの基礎的な関わり方と、相手を理解するためにどう話を聞くかを習得すること</li> <li>2. 自らの感情や行動、その傾向などについて理解し、自らの課題に気づくこと</li> <li>3. 心理職にとって求められる倫理観、役割、心構え、他の専門家との協働について理解すること</li> <li>4. 人と人との関わり、関係について理解を深めること</li> <li>5. さまざまな事例を通じ、実際のクライアントをどう理解し、関わるか、について自らに置き換えて考えること</li> <li>6. 次年度の内部実習に向けた心構えと臨場的な姿勢を身に着けること</li> </ol>		
9. アサイメント (宿題) 及びレポート課題	5人の担当者によって、適宜レポート課題または試験を課す。		
10. 教科書・参考書 ・教材	<p>【教科書】 『DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引』 医学書院 (15~20 回の授業で使用)</p>		
11. 成績評価の規準と 評定の方法	<p>○成績評価の規準 各テーマについて理解し、考究できたか。</p> <p>○評定の方法 担当者全員による合議で評価する。 学習への意欲 30% レポート 30% 実技 40%</p>		
12. 受講生への メッセージ	自分についてのいろいろな発見や気づきがあるので、楽しく参加してください。 今後の仕事に直結する内容を中心として学びますので、積極的な参加を望みます。		
13. オフィスアワー	<p>野口 担当初回授業時に通知する 武内 担当初回授業時に通知する 大島 担当初回授業時に通知する 若松 担当初回授業時に通知する 後藤 担当初回授業時に通知する</p>		
14. 学習の展開及び内容【テーマ、学習の目標、学習の内容、キーワード、学習の課題、学習する上でのポイント等】			
テ ー マ 1	クライアントとの基本的なかかわり方を学ぶ		
第1・2回 かかわり技法を学ぶ			
<p>【学習の目標】 カウンセラー/セラピストがクライアントにどのように映っているか、また言外にどのようなメッセージを伝えているかを常にモニタリングすることは、専門性を持った臨床心理学的面接には欠かせない条件である。ここでは、マイクロカウンセリングの“基本的なかかわり技法”をとりあげ、順を追って学んでいく。誤って発してしまいやすいノンバーバルなサイン、適切な問いかけのしかた、カウンセラーの反応により話題が誘導されていることなど、クライアントと対面した際にまず発生することがらについて、受講生どうしで演習を行い体験的に確認していく。</p> <p>【アサイメント】 各回でとりあげたかかわり技法を日常生活の中で試してみる (授業内の練習だけでは不足です)。</p> <p>【参 考 書】 Allen E.Ivy 他著、福原真知子訳『マイクロカウンセリング 基本的なかかわり技法』丸善</p>			
第3~6回 傾聴を学ぶ			
<p>【学習の目標】 カウンセラーは、カウンセラーとは異なる文化に生き、カウンセラーが経験したことのないクライアント自身の体験をどのように聴くことができるのだろうか。ここではロールプレイを通して、クライアントの話を聴くとはどのようなことをことなのか、体験的に学び、ロールプレイそのものの取り組みにも慣れることを目指す。そのような傾聴を基本としたロールプレイを通して、自分自身の癖、特徴等に気づき、それらが他者にどのような印象を与えているのか、同時に他者にどのような影響を与える可能性があるのか、自分自身と向き合うことも目標とする。</p> <p>【アサイメント】 傾聴を日常生活の中でも試してみること。</p>			
第7・8回 大学附属臨床心理相談室での内部実習に向けて			

	<p><b>【学習の目標】</b> 通学課程は修士1年生の終盤、通信課程は2年生の後半より、附属相談室で行われているケースのインタークへの陪席が始まる（時期についてはクライアントの都合によります）。それに備え、基礎知識の確認、陪席の心構え、面接記録の書き方などを確認する。また、附属相談室の雰囲気や設備に慣れるため、空いている相談室で短いロールプレイを行う予定である。この回はこれまでの演習のまとめの意味も含め、受講生各人の面接の長所や特徴についても話し合う。</p> <p><b>【アサイメント】</b> 内部実習が始まる前でも、院生の皆さんは相談室受付に自由に入出入りできます。院生図書室をご利用の際にはいらしてください。また、さまざまな心理テストや道具も揃えてありますので、学習に活用してください。</p>
<p>テ ー マ 2</p>	<p>感受性訓練—自己、他者の感情への気づきを高め、感情への向き合い方について学ぶ</p>
<p>第9～16回</p>	<p><b>【学習の目標】</b> 心理療法家にとって自己及び他者の感情や行動に気づくということは重要である。支援を要する人の非言語的なものも含めた表現に気づくことと、自身の感情や体験に開かれていることは表裏一体のことである。いわゆる「愚鈍な治療者」とならないために自身の感受性について検討することは訓練期間における重要な学びである。そこで本テーマでは、自身の感情や身体感覚への気づき、他者との関りにおける気づきなどをテーマとしたいいくつかの感受性訓練を体験することで、そうした気づきに敏感であろうとする姿勢を養うことを目標とする。さらに、自身に起こるような感情体験をもあるがままに受け止める一つの方法であり、カウンセリングを行う上での基礎的な教養ともなりうるマインドフルネスについて体験的に理解を深める。</p> <p><b>【学習の内容】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) センサリーアウェアネス実習</li> <li>(2) グループでの感受性訓練</li> <li>(3) マインドフルネス①</li> <li>(4) マインドフルネス②</li> </ol> <p><b>【学習する上での留意点】</b> “経験にひらかれた”態度（理屈は置いておき、感じられるものを素直に受け取ること）で臨んで欲しい。</p> <p><b>【アサイメント】</b> 各回終了後に振り返り記述する。また、マインドフルネス①と②の間にホームワークを課す。</p> <p><b>【参 考 書】</b> 伊東 博（2007）『ニュー・カウンセリング』誠信書房 J.カバットジン（2007）『マインドフルネスストレス低減法』北大路書房</p>
<p>テ ー マ 3</p>	<p>心理の援助者としての倫理観（心構えや役割・協働について）を学ぶ</p>
<p>第17～22回</p>	<p><b>【学習の目標】</b> 組織の一員としての自覚、心理の援助職としての倫理観や役割を理解し、バランス感覚を培う。</p> <p><b>【学習の内容】</b> 最初の数回は、援助職一般に関する人間観、倫理観などについて学び、その後は、現場での具体的な事例などを題材に、心理職として何を基準にどのような検討を行うかについて、ディスカッションを行なっていく。心理の援助職として現場に入る際はその多くで臨機応変で即時的な対応を求められ、かつ唯一の正解が想定できない場合も多い。求められることや目の前に起きていることについて、どのように対処するか、もしくは、どうすることがクライアントや援助者自身を守ることになるのか、検討の視点や倫理的な意識・配慮を培うことを狙っている。倫理とは、私たちの文化の中で流通している諸規範を“理にかなったもの”として理解した上で、より適切なものへと改訂していく試みである。したがって、“単に遵守すればよいもの”としてではなく、各個人が“主体的に考えていく必要があるもの”であるという理解が不可欠になる。一般社団法人日本心理臨床学会の倫理綱領や公認心理師協会の倫理綱領を参照しながら、臨床心理学の専門職としての倫理観を身に付ける。これらを通じて、心理の援助職としてのアイデンティティと役割・立場としてのバランス感覚（理想や現実のバランス、組織の一員としての他職種とのバランスなど）の検討を行う。</p> <p><b>【アサイメント】</b> 自分を振り返り、見直し、日常の中から立ち居振る舞いや事故の価値観との関わりを振り返る練習をすること。</p> <p><b>【参 考 書】</b> 藤山直樹・中村留貴子（監修） 湊真季子・岩倉拓・小尻与志乃・菊池恭子（著）（2014）事例で学ぶアセスメントとマネジメント 岩崎学術出版社 遠藤裕乃（著）（2003）.ころんで学ぶ心理療法 初心者のための逆転移入門 日本評論社</p> <p><b>【学習する上での留意点】</b> 現場で求められることや、実際問題、対応するにあたって必要なことの中でうまくいかないことには自分の苦手なことや価値観の影響が強くなることと思います。クライアントとの面接や他職種連携をする際、そこには必ず双方向のコミュニケーションが発生します。そこで何か問題が生じているとすれば、その一端を自分が担っているという意識は忘れてはならないものです。授業の中で自分の苦手さに気づいた場合には、日常生活の中で練習をするようにしてください。</p>
<p>テ ー マ 4</p>	<p>人と人のやりとり、関わり、関係を捉える</p>
<p>第23～30回</p>	<p><b>【学習の目標】</b> コミュニケーション、関わり、関係について理解し、把握できるようにすること</p> <p><b>【学習の内容】</b> 人は一人のみでは生きられず、クライアントは家族など様々な人と関わっている。個人面接であっても、クライアントの生活には、家族や関係者が関わり影響している。そのため「関わり・関係」を考慮することは、臨床的な実践のどんな場面でも求められるが、単に静的な特性として「仲がいい」「関係が良い・悪い」としても、臨床的に有用ではない。そのため、「関わり・関係」に焦点を当て、具体的にどのようにコミュニケーションすることが、どんな関わり・関係になるのか、それによる影響を理解する。クライアントと家族の関係、関係者間の関係、カウンセラーとクライアントの関係（治療関係）について具体例をもとに取り上げ、動的に「関わり・関係」を捉え扱うことを学ぶ。ロールプレイを中心とした演習を通じて、体験的な学習を行うこととする。</p> <p><b>【アサイメント】</b> 自らの家族や友人などとの関係を題材にし、具体的にどう関わることが、どう影響するかを検討すること。</p> <p><b>【参 考 書】</b> 中野真也・吉川悟（2017）『システムズアプローチ入門—人間関係を扱うアプローチのコミュニケーションの読み解き方—』ナカニシヤ出版。</p> <p><b>【学習する上での留意点】</b> 家族療法やシステムズアプローチは、一対一でのカウンセラーとクライアントのやりとりがちゃんとできたら学んだ方がいいものです。一方で、「関わり・関係」を考慮することは、どんなクライアントでも臨床場面でも多かれ少なかれ必要なことです。ステップとして、安易な理解に留めずに、まず関わり・関係をどう捉えるかを学び、今後の学習や実践へ活かす学びへとつなぐため、分からないことは質問するなど、積極的に演習に参加してください。</p>

テ ー マ 5	初學者の事例から、心理面接の実際と対応のポイントを学ぶ
第 31～40 回	<p>【学習の目標】 心理職の初學者が実践している心理面接の事例に触れ、心理面接に携わる上での留意点、初學者の配慮すべきポイント、事例の何にどう着目するか、対応の良し悪しなどを学ぶ。</p> <p>【学習の内容】 初學者は知識やスキルが未熟なのは当然であるが、そうした中でも、クライアントに寄与するよう心理面接を行う必要がある。試行錯誤しながらでも、クライアントと治療関係を形成し、一歩ずつ治療的な方向へと共に歩んでいくことが求められる。初學者の事例を通じて試行錯誤的な取組とその実際に触れながら、まず事例の記述の仕方やまとめ方、所見の書き方とその留意点を学ぶ。また、初學者としての面接における留意点や配慮すべきポイントを、ディスカッションを行いながら習得していく。</p> <p>【アサイメント】 自らが事例の担当者だった場合を想定しながら、事例に触れ、対応を考えること。</p> <p>【学習する上での留意点】 初學者の事例であれば、第三者的にうまくいっていない点を指摘することは容易いものである。しかし、それをしても、何ら自らの向上にはつながらない。知識やスキルが未熟な中で、試行錯誤しながらも関係を築き、どうやったら治療的な方向へと進めるようになるかを、自らが担当者になったつもりで考えること。また、実際の事例を通じて、クライアントの理解とその対応について、見識を深めること。積極的に質問や意見をし、グループディスカッションに参加するように心がけてください。</p>
テ ー マ 6	クライアントの行動・認知・感情の特徴とその理解
第 41～50 回	<p>クライアントの理解と面接の流れ</p> <p>【学習の目標】 事例を通して、クライアントの行動・認知・感情の特徴について理解し、面接をより実りのあるものにする。具体的には、本講義や他の関連科目で学習した面接の基本的技術に加え、よりクライアントの視線でかかわれるようになることを目標とする。</p> <p>【学習の内容】 不安障害や人格障害の症例について、以下の内容を検討する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①事例と DSM を照合する</li> <li>②クライアントになりきるにはどのようなポイントを押さえればよいか</li> <li>③問題を誘発している要因、維持している要因は何か</li> <li>④条件づけられた反応／イラショナル・ビリーフと考えられるものは何か</li> <li>⑤問題の構造はどうなっているのか</li> <li>⑥クライアントの家族や関係者は、どのように関わっているか</li> </ol> <p>【アサイメント】 提示した事例について、行動・認知・感情・維持要因・問題の構造から分析する。</p> <p>【教科書】 DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引 医学書院</p>
テ ー マ 7	内部実習を想定した事例検討
第 51～60 回	<p>事例検討を通じて、今後クライアントを担当し、心理面接を実施していく上での心構えを作る</p> <p>【学習の目標】 自身が担当することをシミュレーションしながら、事例のクライアントをどう理解し対応していくかを見出していくこと。</p> <p>【学習の内容】 事例検討により、継続事例におけるカウンセリングのプロセスやクライアントの変容、インテーク面接・初回面接における対応のポイントなど、内部実習で自らが事例を担当することを想定しながら、グループディスカッションを積極的に行い学ぶ。各自が、面接担当者となり、実践する上での心構えを作る。知らない事柄（稀な病名、クライアントが服薬している向精神薬、利用しているサービスや機関など）について、事前に調べ、概要を把握するなど、次年度以降の内部実習に向けて、事例を通じての演習を行う。</p> <p>【アサイメント】 知らない事柄（病名とその特徴、クライアントが服薬している向精神薬、利用しているサービスや機関など）について、事前に調べ、理解しておくこと。</p> <p>【学習する上での留意点】 自らに置き換えて、クライアントを担当するにあたっての責任ある行動を日頃から考えること。そのために、自らの課題を理解し、どう向き合うかを考えながら、講義に臨んでください。</p>